

春

宮本百合子

青空文庫

硝子戸に不思議に縁がある。この間まで借りていた二階の部屋は東が二間、四枚の素通し硝子であつた。朝日が早くさし込む。空が雑木の梢を泛べて広く見渡せ、枝々の間から遙に美しく緑青をふいた護国寺の大屋根が見えた。温室に住んでいるよう、また、空中に浮いているような気もしたが景色はよかつた。今度引越した小さい家は、高台ではあるが元の借間程見晴しはない。けれども硝子戸はここにもあつて、南方の縁側が八枚、雨戸なし。黎明、朝、ひる間、順々に外光がたっぷり八畳に流れ込む。夜、森とした中で机に向つてい、ひよいと頭を擡げると、すぐ前に在る障子の硝子面、外の硝子の面と、いきなり二重に自分の顔や手つきが映り、不気味になる。——ああ、こんなにすき透し！ 泥棒にすっかり見られてしまう。どうしても、カアテンがなければ駄目だ！

カアテンをまだ買わないので、朝少し眩しい。私は沢山ぐつすり眠りたい。そこで、工面をし、机の引出しから友達の香典がえしに貰つた黒縮緬の袱紗を出した。それを二つにたたみ、鼻の上まで額からかぶる。地がよい縮緬なので、硝子は燐く朝なのに、私の瞼の上にだけは濃い暗い夜が出来る。眠り足らず、幾分過敏になりかけていた神経は快いくつろぎを感じ、更に二三時間休みを得るのだ。

一緒に暮している友達は、いつも私より一時間位早い。彼女は、目が醒めると勢よく二階から降りて来る。その階子が、私の眠っている部屋の頭の方に当るので跫音は大抵ききつける。ききつけながら、私は眠りつづけるのだが、友達は、どちらかといえど私にも早く起きて欲しいに違いない。起きてよい頃と思うと、物音に遠慮しない。

然し、その朝は余り眠く、体がくたくたであつた。眠いという溶けるような感覚しか何もない。十一時頃茶の間にやつと出た。まだ包紙も解いてないパン、ふせたままの紅茶茶碗等、人気なく整然と卓子の上に置かれている。——奇妙なことと思い、少し不安を感じた。起きた順に、朝食はすまして勉強することに定めてあるのだから。見ると、日の照る縁側に、まだ起きぬけのままの姿で、友達が立つてゐる。ただのんきに佇んでいるのではない。丁度自分のところまで閉めた硝子戸によりそい、凝つと動かず注意をあつめて庭の方を観てゐるのだ。私は生きもの同士が感じ合う直観で、ひとりでに抜き足になつた。そして後から廻つて近よつた。

「どうしたの、なあに？」

「文鳥が逃げちやつた。そこにいるのに」

成程！ 篠の中は一羽だ。つい鉢前の、菊の芽生えの青々とした低いかげにもう一羽が

出でている。外にいる方の文鳥は、見違えるほど綺麗に感じられた。瑞々しい、青い、四月の菊の葉に照つて、薄桃色の、質のよい貝殻のような嘴、黒天鷺絨^{ビロード}のキヤツプをのせた小さい頭、こまやかな鼠灰色の羽なみが、実に優美だ。鳥は、チチ、チチ、と短く囀りながら、二とび三とび地面を進んで見る。思いがけず翔び出した広い空気をまだ信じられず、子供らしく愛らしく、愕きに満ちているようだ。その感情のあらわれた、不決断な風が一層美しさを添えた。ついその上の軒に吊つた、しやれたサラセン風円屋根つきの籠の中では、のこされた一羽が、外の一羽から目をはなさず、切ない調子でせきこみ、鳴きかけている。チチ、チチユン。外のは内の仲間の鳴声に心牽かれる。さつと水際立つた翔び立ちはとても出来ない。チチ。……一寸近よりそうにする。然し、鳥の本性は籠の中より野天の甘美なことを熟知しているに違いない。縁側の手前よりもこつちには、決して、決して来ない。チチ、チユ。……思いかえしたように、また元の菊の葉かげ、一輪咲き出した白沈丁花の枝にとまって、首を傾げ、黒い瞳で青空を瞰^みる。次第に強い憧れや歓喜が迫つて来るらしい。自然の輝きある朝の緑、幹の色、土の色の裡で、文鳥は本当に活きていく小鳥のように見えた。

「つかまえられて？」

私は、外景に於て見る文鳥の美しさにまけ、捕まらなくてもよいと感じる。つかまつては淋しいようさえ思う。

「——妙なものね、鳥はやつぱり樹や草と一緒に見る方がずっと立派ね、まるで色が引立つじやあないの、ずっと綺麗ね」

この一対は二月、私の誕生日に、友達である彼女が雨の降る中、買つて来てくれたものだ。そう思えばこのまま放してしまるのは、また違つた意味で寂しい。彼女が、さつきからああやつて立つたまま根気よく、恐らく決して無い文鳥の万ガ一の気まぐれを待つているのも同じ原因からだろう。

「とんだことを仕たわね、さつき粟をふくときどうしたのか、口を閉めなかつた。帰るかしら？」

「さあ……多分だめよ」

「とんだことをしてしまつた」

彼女の心持を理解し、私は云つた。

「逃げる氣もなく、翔んだら広いところに出てしまつたというわけね。——でも、全くいわ、こうして外の景色と一緒に」

暫く眺め、友達は呟いた。

「薄情な奴！ 一人で逃げ出すなんて！ 帰つて来い！ 帰つて来い！」

私は、微かな哀愁に似たものを感じた。

「——寸そのままにして置いて御覧なさい。余り私達がそばにいると、却つて近よらな
いかもしないから」

私共は、トウストをたべ、紅茶をのんだ。その間にも、友達はちよくちよく縁側に出て
見た。

「どう？」

私はこちらの部屋に坐つたまま訊く。

「うむ？」

氣をとられた生返事だ。私も立つてゆく。二人で見る。文鳥は、さつきから見ると大分
外気に馴れた。一はばたきごとに、違った枝、違った樹木の匂りを味い、知ろうとするよ
うに、小刻みに、自分を自分の轡りで励しながらとうとう、垣根近い樺の下枝まで行つた。
チチチ。同じ枝の上であつちを向く。直ぐこつちを見なおし籠を見、中で強く不安げに鳴
きつづける仲間に応える。幾度に確かな自信ありげなところが出て來た。いよいよ籠に戻

るという万ガ一は期待し難い。

「仕様がないな。——今朝ね、カタログが来たので、早くそれを見たいと思いながら、餌が無さそうなので吹いてやつたりしたもんだから」

「はずみね。それにこの籠の戸が少し普通より堅いから、ぱたんと落ちなかつたのよ」

「一日こうやつてもいられないわね……二階に上つてしまおう！」

文鳥は、桜の枝から八つ手に翔んだ。細い脚でつかまられて、八つ手の手毬のような叢花がたわたわ揺れる。

昼過になつた。日ざしが斜に樹木の葉うらから金色にさすようになつた。文鳥は、垣根の外へまだ翔び去りはしない。けれども、今は自由に、右に左、庭じゅうを飛ぶ。人の近よる氣勢にはつと翔び立つ羽音など、つよく雄々しくなつて來た。庭にいるのは、籠に残した仲間に牽かれてではないことが明かになつた。残された方も幾分独りに馴れ、気が鎮つたらしい。つきつめて外の鳥を見ていた眼をそらせ、グジユウジユウとうつとりひとり鳴きをしながら、粟をつつく。その有様は、心易いような、果敢ないような感情を起させた。外の文鳥は、自分の入つていた籠や籠の仲間を忘れきつたのか？

私は用事があつて夕刻から夜にかけて外出した。私は帰るなり訊いた。

「どうして、鳥は」

留守居の若い娘は、弁解するように答えた。

「いつまでも硝子戸をあけて置きましたが帰つて参りませんから閉めてしましましたけれど……」

「いいよ、いいよ」

友達が云つた。

「かえりたくない鳥さんには帰つて貰わないでも」

今夜は何処で蟻を見つけるのかな。心配するのは人間の心持だ。自然是豊富に、枝の茂み葉のかさなりを持つている。私は硝子戸を静にあけ、外を見た。暗い。室内からさす燈火のかけで、近い樹木の葉が一部分光る。軽く風が吹いた。梢が動く。動く梢のどこかの奥に、あの優美な羽色を夜に沈め、広い世界に出た始めての眠りを快く、爽やかに眠つているだろう文鳥。夢に何を見るか。沈丁花の香りが流れて來た。私は鉢前を見下した。鉢前に、しるしばかりの池がある。池の面がさやかに蒼んで、縁側からは見えない中空の何処かに現れた月を思いがけずうつしていた。私は、永い間その月かげを見守つた。月を中心には、文鳥や沈丁花が心を往来する。私は元読んだ短い詩の断片を思い出した。

秋来見月多帰思

自起開籠放白鷗

今は春だし、文鳥だし、連想はちぐはぐなようだが、私にとつて或る切なものがあつた。思い出。二年前、或る秋偶然この詩を読んだ。私は更に繰返して幾度もよみ、終に涙を流した。ああ「自ら起て籠を開いて白鷗を放つ」白鷺を放つ。この情。「秋来見月多帰思」境遇の上から実感に轟々と迫るものがあつたのだ。

私は夜に向つて戸を閉めた。

〔一九二五年五月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「カーマンカレン」

1925（大正14）年5月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

2004年1月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://wwwaozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

春
宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>